

新建材「CLT（直交集成板）」などを活用した新校舎。ここが「新しい森や木の文化、技術を熟成し、世界に発信する」未来の林業従事者たちの基盤になる。



サーフィンがきっかけで山の偉大さに気づいた小笠原さん。「ゆくゆくは自分の山を持ちたい」と夢は大きい。



今春、地元の森林組合に就職した岩本さん。県庁の林業職員である父に続き、親子2代で高知の林業に携わる。



林業技術や林業機械の操作、森林作業道の開設など、野外実習が約7割を占める充実した研修内容。



高知県林業労働力確保支援センターの協力のもと、就職相談会を実施。研修生一人一人の個性や適性に合った就職先が見つかる。

高知県立林業大学校／高知県

これからの林業をけん引する“若木”たち

就業者の高齢化や後継者不足は、林業も同じ。先人が思いを託して育てた木と山を守り、生かすために、即戦力となる人材育成に積極的に取り組んでいます。

取材・文／岸田直子



昨年末に完成した新校舎の前で。平成29年度の基礎課程の研修生たち。

林業分野で役立つ12の修了証を取得

3期生として基礎課程を学んだ岩本捷さん（19歳）は、今春、地元の森林組合に就職した一人。高知県生まれの高知県育ちです。「農業高校の授業で、チェーンソーを使う実習が大好きでした。卒業後すぐに林業の道に進もうと思っていたら、先生から『資格を取得してからの方がいい』とアドバイスされて林業学校へ。フォークリフト運転技能など12の修了証を1年の研修で取得することができ、大きな自信になりました」技術面だけではなく、高校で培った森林に関する知識がさらに深まったのも、大きな収穫です。「山を手入れすることで、土砂災害も防げます。小さいころから身近にあった高知の山を、これからは自分の手で大事にできると思うと胸が躍ります」

知識が深まるほど募る山や木への畏敬の念

林業大学校は研修生の約3割が県外出身者で、18歳から50歳代まで幅広いのも特徴。同じく基礎課程を学び、今春、県内の森林組合に就職した小笠原誠さん（43歳）は、福島県出身です。

「東京の会社から転勤で四国へ。サーフィンが大好きなので、きれ

林業の未来を担う若手を育成

県土の84%を森林が占める、森林率日本一の高知県。木材需要が高まる一方、関係者の高齢化と後継者不足という課題を抱えています。そこで、担い手の確保と人材育成を目的に、高知県立林業大学校が設立されたのは平成27年のこと。林業に携わるうえで必要な知識と技術を学べる基礎課程と、林業従事者がさらに技術を学べる短期課程を開講。基礎課程の定員は20名で研修期間は1年。これまで卒業した第1期生14名、第2期生19名は県内の森林組合（所有者に委託され森林を管理する組織）などに就職し、現場で活躍しています。「若い人たちにとっては、林業という遠い世界で、きつい、危ないというイメージがあるかもしれませんが。事実、何の知識もなく就職すると離職率も高い。でも、必要な知識や技術を身に付ければ、これほどやりがいのある仕事はありません。そのやりがいを胸に、林業を一生の仕事にしていこうという人材の育成に努めています」と、高知県森づくり推進課林業大学校準備室チーフの遠山純人さん。4月からは建築家の隈研吾さんを校長に「林業大学校」に改称し、3つの専攻課程を開講して、さらなる人材育成に力を注ぎます。

Profile

高知県立林業大学校

平成27年4月に「林業学校」として基礎課程と短期課程を開講。30年4月には「林業大学校」に改称し、森林管理コース、林業技術コース、木造設計コースの3コースからなる専攻課程を開講。これからの日本の林業を支え、守っていく人材育成に貢献している。所在地／高知県香美市土佐山田町大平80 高知県森林総合センター内 <https://kochi-forestry.ac.jp/>

いな海と波のよさ、土地と人柄のよさに感動。会社を辞め、四国で携帯電話基地局の折衝、管理などをする会社に再就職したんです」そのうち、海がきれいなのは、きれいな山があつてこそだと気づき、林業に携わろうと入学。「前職では分からなかった山を計画的に整備することの重要性など、学べば学ばど山は暮らしに欠かせない大切な存在であるという認識を深めました。農家さんが悩んでいる鳥獣被害も、里山を保全・活用すれば少なくなります。また、日本の木は中身が詰まっています。質がともいいますので、もっと使っていきたいという思いも強い。先人たちが残してくれた山や海という宝を、後世に引き継いでいきたいと思っています」この春も日本の林業をけん引していく卵たちが、新たに夢を抱いて集まっています。